

ウラナミジャノメについてはヒメウラナミジャノメの項で比較近縁種として記載したように、絶滅の危機が増大している絶滅危惧Ⅱ種に指定されている。高砂市には生息してなく、近隣では加古川のごく限られた何箇所かの狭い地域で、6月半ば頃からみられる。日本全国でもその分布はせまく、神奈川県小田原市が東限でどこの産地でも発生場所は局地的な傾向が強いといわれ、対馬、壱岐、屋久島、種子島には生息が確認されているという。筆者は高知市でホシミスジが生息する地区で、ちょうど同じ発生時期にこのウラナミジャノメもいて目にしたことはあるが、昨2008年6月に初めて加古川の里山・ギフチョウ・ネット会員が中心となってヒメヒカゲの生息調査を実施した際に、50数年ぶりにこのウラナミジャノメにも出会えた。

近縁のヒメウラナミジャノメとは、翅の目玉模様为数が少ないのが明瞭な区別点で、通常後翅裏面には3個の眼状紋がみられ（ヒメウラナミジャノメは5-6個）、2008年には4個という個



体もみられた。同時に片方の翅の目玉模様が異常に流れた珍しい変異個体にも出会えた。一つひとつのチョウに著者による思い入れのタイトルが付されたユニークなエッセイ集である師尾信著「蝶ウォッチング百選」という本の続編（晩聲社、2003、p.044）に「疎林に遊ぶ」ウラナミジャノメという項があって、その中で「静岡県浜北市には後翅裏面の蛇の目紋が一つオマケについた4個のものが多い」という記述があり、地域によってそういった特定の遺伝子をもった群が密度濃く生息している。こういう事実があるため、全く異なる地域で発生しているチョウをもって異なる野外に放つ「放チョウ」という行為は遺伝子レベルでの攪乱がおきるのでやめよう、という意見につながるわけだ。



ウラナミジャノメの幼虫の食草としてススキ、イヌビエなどのイネ科、カヤツリグサ科のショウジョウソグなど確認されているが、加古川の発生地では何を食べて育つのかは長く種が確認できないままであった。ウラナミジャノメが好んで飛ぶ環境にはジャノメチョウ科の幼虫のエサとしてよく利用されるササ・タケ類が多く、撮影記録ができた場所でもほとんどがササの葉っぱにとまる個体で、これらササの葉っぱを食べればいいのに、とつい思ってしまったほど実にマッチして見えた。幼虫の食草について高い関心をもって観察を続けるなか、2010年4月について野外でショウジョウソグを摂食中の幼虫を発見できた。ヒメヒカゲの発生地でその幼虫を探している過程で偶然発見したもので、幼虫の頭部に細毛があるという点でヒメヒカゲの幼虫とは明瞭に区別ができた。

本種は地域によっては第二化の発生が見られるが、加古川には唯一2006年11月5日の確実な記録以降の観察例はない。飼育時にチガヤやエノコログサなどを与えると9月以降に第二化が羽化することがあるが、加古川で自然状態での第二化発生が認められない理由はいぜん謎だとする考察を含めて「やどりが」（No.229, p.32-39, 2011）に論文発表をした。さらに2015年5

月に、上記しているケネザサも食草になっていることが分かって、やはり「月刊むし」に短報 (No.536, p.53-54 2015) として発表した。以下にブログとしてまとめたものを示す。

Apr. 3, 2010 **ウラナミジャノメ幼虫、野外で発見**

ウラナミジャノメの野外における幼虫をついに発見した。おそらくヒメカンスゲだと思われる、ヒメヒカゲの幼虫が好む食草を夢中で摂食する幼虫を確認。実は、本日の目的は、昨年に確認していたヒメヒカゲ幼虫の越冬明け状態をみることだったが、目的の場所にヒメヒカゲ幼虫を確認できず、昨日までの雨でぬかるむ草むらを少しだけ範囲を広げてヒメヒカゲ幼虫の探索を始めた、その目に、緑濃いウラナミジャノメ幼虫



の姿が飛び込んできたというわけ。その後の調べで、この食草はヒメカンスゲではなくショウジョウスゲだと同定できた。

現在、ウラナミジャノメにツクシズメノカタビラを与えて飼育中で、緑一色のなかに保護色の幼虫を探すのが習慣となっており、今回の野外での発見は、こうした飼育下で幼虫に対する観察眼を養っていたことが役立ったといっておいて間違いはないだろう。それもちょうど食草の葉先を食っている場面に出くわしたことがラッキーで、しばらくすると下の画像に示すようにUターンをして草の根元に身を隠してしまうという野外でならぬ挙動がみられ、もしもこの段階であれば、野外での幼虫発見はとても難しいことだろう。周辺環境の写真は中央の緑地帯が幼虫のいた場所で、特に木陰があるわけではなく平坦な草むらの一部であることを伝えるために入れておいた。兵庫県では唯一イネ科のメリケンカルカヤでの幼虫記録があり、昨年の幼虫調査ももっぱらイネ科植物を中心に調査をした。一方、母蝶から採卵させて以降はエノコログサやスズメノカタビラなど、あたりの雑草なら何でも食いそうな印象であった。今回、スゲ科植物で幼虫を発見できたことは、ウラナミジャノメの食性が多岐にわたる可能性を示しているが、さらなる野外実態調査が必要だ。

May 9, 2015 **重要新知見：ケネザサを食う幼虫**

蛹化準備で移動したはずの幼虫のその後が気になって、ヒメヒカゲの幼虫観察に再度フィールドへ。その幼虫の行方は結局わからないままだが、胸躍らせる新知見に遭遇！何と、ケネザサを食っている幼虫が観察できたのだ。撮影時に近づきすぎて警戒されたのか、摂食活動を停止して20分以上動きを見せない。もしかしたらそのまま眠っている？クローズアップ撮影記録から



は頭部に細毛が多いのを観察できるが、ヒメヒカゲなのかウラナミジャノメなのかがすぐには判別できない。2010年4月にショウジョウスゲを摂食中のウラナミジャノメ幼虫を観察して「やどりが：No.229, pp.32-39, (2011)」に投稿しているが、ウラナミジャノメの幼虫がこの草原で何を食べているのかが分かっていなかった頃、ケネザサを食っているのではないかと推定して探索したこともあった。しかし、これまで、いずれかの幼虫がケネザサを食っている現場を発見したのは今回が初めて。幸い、自宅にショウジョウスゲとケネザサ双方を植栽している鉢があるので、正確な判定のためこの幼虫を持ち帰り飼育を試みることにする。

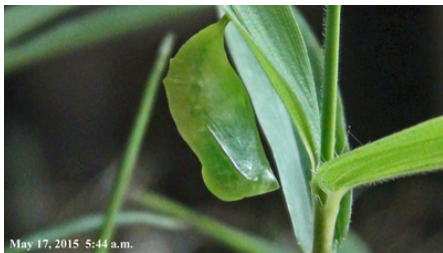
May 10, 2015 ウラナミジャノメか？

フィールドから連れてきた幼虫の「ネコ顔」の撮影記録をとると、その細毛の多い点でウラナミジャノメの可能性が高いように思えるが、蛹化まで進まないとの確信が持てない。



May 17, 2015 やはりウラナミジャノメ

ケネザサを摂食していた幼虫は、推定通りウラナミジャノメであることが蛹化した段階で事実となった。脱皮蛹化の瞬間は見逃したが、早朝に蛹化したらしい。そろそろ蛹として安定した



ろうとのぞいた2時間経過した時点でも、まだ緑が濃くてみずみずしさが残って見える。低い位置からの撮影で三脚が使えないため、位置をあげて撮影すると、光の当たり具合も変化して、蛹の体や、翅脈が透けて見える映像記録となった。

なお、本種の卵はヒメヒカゲが純白であるのに対し、美しい青緑色をしている。野外での自然卵はいまだに見たことがありませんが、母チョウに産卵させた記録を示しておきます。

